三重県埋蔵文化財調査報告116-2

大里西沖遺跡（2次）

１９９４．３

三重県埋蔵文化財センター

例言

1．本書は、平成５年度農業基盤整備事業地内における津市大里地区の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部が負担した。

3．調査体制は下記のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
調査期間　平成５年９月27日～平成６年１月24日
調査面積　2,000㎡
調査担当者　主事　石川隆朗・研修員　船越重伸・調査補助員　山口順也

4．遺構図面における方位は、すべて磁北を用いた。なお、当該地域の磁針方位は西偏６度30　分（平成元年度、国土地理院）である。

5．本書に使用した遺構表示記号は下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＨ：竪穴住居、ＳＤ：溝
ＳＡ：柵、塀　ＳＫ：土坑　Ｐ：ピット
ＳＸ：墓、その他性格不明遺構

6．大里西沖遺跡の発掘調査は、平成３年度に行った発掘調査をＡ地区とし、今回の調査はＢ・Ｃ地区として発掘調査に入った。しかしながら、調査時点での遺構番号はＡ地区からの通番となっていない。このため、本報告では、調査時の遺構番号に100を加えたものを報告書掲載番号とした。

7．本書で報告した遺構の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8．遺物整理は石川隆朗のほか泉雄二があたり、管理指導課がこれを補佐した。

9．本書の編集は泉があたり、執筆については担当名を文末に記述した。

10. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前言 …… 1
　1．調査の経緯 …… 1
　2．歴史的環境 …… 3
Ⅱ　遺構 …… 5
　1．B地区 …… 6
　2．C地区 …… 16
Ⅲ　遺物 …… 22

挿図目次

Ⅰ　位置と環境
　第1図　周辺位置図(1:6,000) …… 1
　第2図　遺跡地形図(1:25,000) …… 2
Ⅱ　遺構
　第3図　調査区位置図(1:2,000) …… 5
　第4図　1号墳 墳丘盛土 土層図(1:100) …… 6
　第5図　B地区 土層断面図(1:100) …… 7
　第6図　B地区 東側遺構平面図(1:200) …… 8
　第7図　B地区 西側遺構平面図(1:200) …… 9
　第8図　古墳時代土坑（SK141・149・155・166）遺構平面図(1:40) …… 11
　第9図　SK170遺構平面図(1:40) …… 12
　第10図　B地区 調査区西側遺構平面図(1:100) …… 13
　第11図　SB204遺構平面図(1:100) …… 15
　第12図　SD175石組遺構平面図(1:40) …… 15
　第13図　SE171遺構平面図(1:100) …… 15
　第14図　C地区 遺構平面図(1:200) …… 17
　第15図　C地区 土層断面図(1:100) …… 18
　第16図　C地区 調査区北側遺構平面図(1:100) …… 19
　第17図　SK111遺構平面図（1:40 …… 19
　第18図　SK105遺構平面図(1:40) …… 19
　第19図　SK110・112遺構平面図（1:10） …… 21
Ⅲ　遺物
　第20図　出土遺物（1） …… 24
　第21図　出土遺物（2） …… 25
　第22図　出土遺物（3） …… 26
　第23図　出土遺物（4） …… 27
　第24図　出土遺物（5） …… 28
　第25図　出土遺物（6） …… 29
　第26図　出土遺物（7） …… 30
　第27図　出土遺物（8） …… 32

表目次

第1表　年度別調査一覧表 …… 1
第2表　B地区時期別一覧表 …… 6
第3表　C地区時期別一覧表 …… 18

写真図版

ＰＬ１　Ｂ地区調査区全景（南から）
　　〃　東側全景（南から）
ＰＬ２　〃　西側掘立柱建物群（北から）
　　〃　井戸ＳＥ171・ＳＤ175（西から）
ＰＬ３　〃　ＳＫ170（東から）
　　〃　ＳＫ170（北から）
ＰＬ４　Ｃ地区調査区全景（北から）
　　〃　４号墳（北西から）
ＰＬ５　〃　ＳＨ120（北から）
　　〃　ＳＫ110（北西から）
ＰＬ６　〃　ＳＫ112（南東から）
　　〃　ＳＫ112（南東から）

Ⅰ　前言

1　調査の経緯

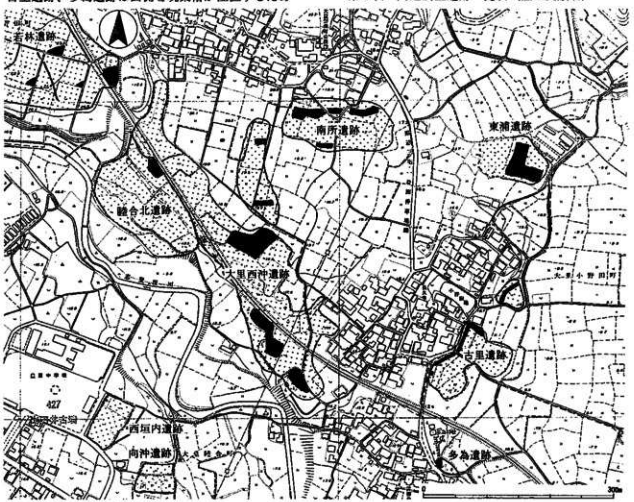
大里西沖遺跡は、津市北部の伊勢平野と山間部の境目にあたる安芸郡芸濃町の丘陵を源とする志登茂川の中流左岸の侵食段丘上にあり、標高14～16m前後の南向きのゆるやかな斜面に位置する。600mほど下流では、志登茂川に合流する前田川が北流しており、当遺跡の立地する台地は、南北幅約400～500m程の細長い台地である。

周辺に県営ほ場整備事業が計画され、昭和63年から分布・試掘調査を継続的に行ない、新たに台地北部で南所遺跡、西部で若林遺跡、大里西沖遺跡、東部で東浦遺跡、古里遺跡、多為遺跡、上流の前田川左岸でも小谷A・B・C遺跡を確認した。このうち古里遺跡、多為遺跡は西側を現集落が位置するために西限について、南所遺跡も北側に現集落が位置するために北限については明確ではない。

これら事業で削平を受ける部分については、平成3年度に大里西沖遺跡・南所遺跡、平成4年度に東浦遺跡がやや広い調査を実施した他は、小規模な調査である。（第1表）

年度	遺跡名、()内は調査面積
昭63年[1]	若林遺跡(680)
平3年[2]	大里西沖遺跡(2,100)、南所遺跡(1,660) 小谷A・C遺跡(450)、若林遺跡(140)
平4年[3]	東浦遺跡(2,000)、小谷C遺跡(750) 古里遺跡(830)、多為遺跡(50)
平5年	大里西沖遺跡(2,000)

第1表　周辺調査遺跡一覧表（註は文献名）



第1図　周辺位置図(1:6,000)

第２図　遺跡位置図(1:25,000)

なお、台地内で周知の遺跡は、台地西部斜面の睦合北遺跡（津市遺跡番号426）が知られているが、試掘調査の結果、斜面から下では遺構はなく、遺跡範囲縁辺部であるＪＲ西の標高約16mの台地縁辺部で遺構を検出したのみである。この検出した遺構は、ＪＲ東側で確認された大里西沖遺跡と一体と見るべきであろう。

また、前田川北部の農道整備事業に伴う箇所で石田３号墳[4]（津市遺跡番号683・平成３年４月実施）の試掘調査を行ったが、古墳でないことが判明した。このほか、志登茂川南岸にある向沖遺跡東側の ほ場整備事業地内でも試掘調査を実施したが遺跡は確認されていない。[5]

2　歴史的環境

志登茂川流域では、縄文以前の遺構は少ないが、近年の調査で序々であるが増加している。最も古いものは遺構としては確認してないが、「木葉形尖頭器」と呼ばれる槍先と思われる石器が東浦遺跡(2)[6]で出土しており、先土器時代から縄文時代創早期頃のものと推定される。

縄文時代の遺構については、大里西沖遺跡[7]（１）で縄文時代中期末の竪穴住居１棟・土坑４基や東浦遺跡[8]で縄文時代中期の竪穴住居跡を認している他、小谷遺跡[9]（３）、若林遺跡[10]（４）では縄文時代中期から後期にかけての土器片を出土しているが、当概期の遺跡の数としては少ない。

弥生時代には、南浦遺跡（５）・西垣内遺跡（６）・向沖遺跡（７）・山田井遺跡（８）などがあり、志登茂川南岸に集中している。東部にある川北遺跡[11]（９）で弥生時代中期の土坑や橋外内遺跡[12]（１０）では弥生時代中期の方形周溝墓や土坑、溝などが検出されている。志登茂川南側にある安濃川町から延びる見当山丘陵を隔てた安濃川流域では、古くから知られる県下最大の弥生集落である納所遺跡や弥生時代中期の竪穴住居が２００棟以上確認された長遺跡、弥生時代中期の有力者層の墓制である単独の方形台状墓である倉谷弥生墳墓(11)など県下を代表する弥生時代の遺跡が数多く知られている。これに対して、志登茂川周域では発掘調査で明らかとなった弥生時代の遺跡は少なく、また、新たに発見される可能性は低く、弥生時代の開発は遅れていたことが窺える。

古墳時代では、住居跡群が確認された東浦遺跡[13]・川北遺跡・中寓遺跡[14](12)・安養院跡[15](13)をはじめ、睦合遺跡(14)・蟹田Ａ遺跡(15)・蟹田Ｂ遺跡(16)・山室古窯跡群(17)などの散布地があるものの、前方後円墳などの首長墓の存在は知られてなく、円墳からなる古墳群の存在が知られるだけである。このことは弥生時代から古墳時代にかけての開発は、南側の安濃川流域より遅れていたことを示すものであるが、近年の調査で、志登茂川の南北にせまる丘陵が開ける出口と言える当遺跡から東に約１km下流で古墳時代の初期須恵器を大量に出土した六大Ａ遺跡[16](18)は、上流に存在する安濃町の最奥部に所在する５世紀末の須恵器・埴輪併焼窯である内多遺跡(19)との関係から、物資の搬送に安濃川を使うより志登茂川が海運交通に密接な関わりが合ったことが想定されている。

また、大里西沖遺跡[17]でも奈良～平安時代の掘立柱建物６棟が検出されているが、周辺では奈良時代以降になると、奈良時代の集落跡が見つかった多為遺跡[18](20)や、奈良時代の竪穴住居が検出された小谷Ｃ[19]遺跡、奈良時代から室町時代末（約400年前）の遺物が出土している古里遺跡[20](21)・若林遺跡・南所遺跡[21](22)などで小規模な遺構が見つかっている。これに対して平野の広がる東側では六大Ａ遺跡・六大Ｂ[22]遺跡(23)・橋垣内遺跡・大古曽遺跡[23](24)など中勢道路建設にかかる発掘調査や平成５年度に実施した大垣内遺跡[24](25)の発掘調査などで律令期の大規模な遺構が多数見つかっている。

奈良の都の平城京出土の木簡に「伊世国奄伎郡」（表）「久苔多里私部小」（裏）と書かれたものがあり、これは、現在の大里窪田町のあたりと考えられている。新たに発見された六大Ａ遺跡から大古曽遺跡の所在する一帯でもあり、志登茂川流域が奈良時代には国の行政組織に組み込まれるまで発展をとげていったことがわかる。

平安時代に成立した『和妙抄』記載の「窪田郷」も当地域のこととされ、古墳時代までは開発が遅れていた地域であるが、律令期以降は古代奄伎郡の中心地となるまで成長を遂げていった。

さらに、平安時代以降、旧大里村には「窪田荘」

という荘園があることが、また、西南方向には一身田の高田本山専修寺があるほか、志登茂川の南には、西南から東南に向かって伊勢神宮に通じる伊勢別街道が通っており、当地域は中世から近世を通して発展していった。　　（石川　隆朗）

註

1、伊藤裕偉「若林遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊、三重県教育委員会、1989.3

2、伊藤裕偉「大里西神遺跡」・「南所遺跡」・「若林遺跡」、森川幸雄「小谷A遺跡」・「小谷C遺跡」『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊、三重県埋蔵文化財センター、1992.3

3、小林秀「東裏遺跡」・「多為遺跡」、石川隆郎「古里遺跡」、清水正明「小谷C遺跡」、「東裏遺跡・椋本南方遺跡ほか」三重県埋蔵文化財センター、1993.3

4、『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊、三重県埋蔵文化財センター、1992.3
前宮P２には、ほかに古墳でなかったものには、鎧台A・B古墳、すの坪古墳、小野田古墳が上がっているが、周知の遺跡ではない。

5、よめ塚古墳(津市遺跡番号460)は、現地調査の結果、津市遺跡地図（津市教育委員会、1988）に記載されている位置から南に約200m離れた位置にあることが確認された。

6、５と同じ。小林秀「東裏遺跡」16～22P。

7、４と同じ。伊藤裕偉「大里西神遺跡」18～20P。

8、５と同じ。小林秀「東裏遺跡」８P。

9、４と同じ。森川幸雄「小谷C遺跡」27P。

10、４と同じ。伊藤裕偉「若林遺跡」

11、「川北遺跡」　津市教委調査『三重県埋蔵文化財年報14』三重県教育委員会1984.3による
丘陵西部で古墳時代前期の竪穴17棟以上、弥生時代中期土坑、円墳(7C前半）などを検出した。

12、橋外内遺跡　『三重県埋蔵文化財センター年報１～４』三重県埋蔵文化財センター1990.3～1993.3による

Ｈ１年　弥生時代中期方形周溝１・土坑12・溝１
　　古墳～平安時代の竪穴２・建物52・土坑９・溝12

Ｈ２年　弥生時代後期土坑墓２・溝２・河２
　　古墳時代竪穴(前期）５・河１
　　飛鳥～奈良時代溝３

Ｈ３年　飛鳥時代掘立柱建物１・井戸１
　　飛鳥～平安時代の大溝（柵・下駄）

Ｈ４年　Ａ地区　旧河道２（古墳～奈良時代）
　　Ｂ地区　古墳～奈良時代建物18
　　Ｃ地区　古墳～奈良時代建物18
　　奈良時代井戸１、室町井戸１

13、３と同じ、小林秀「東裏遺跡」
　　縄文時代の土坑
　　古墳時代　竪穴11棟
　　奈良～平安時代の竪穴１・建物５

14、萱室康光『中嶋遺跡発掘調査報告」津市教育委員会、1977.3
　　古墳時代前期竪穴３
　　奈良・平安時代の建物、平安時代井戸

15、池端清行・米山浩之『安養院跡発掘調査報告」津市教育委員会、1990.3
　　古墳時代の竪穴４・建物19

16、初期須恵器としては県内でも最古の製品である。

17　２と同じ、伊藤裕偉「大里西神遺跡」

18　３と同じ　小林秀「多為遺跡」
　　弥生～奈良時代の竪穴住居４

19、４と同じ　清水正明「小谷C遺跡」
　　飛鳥時代土坑１
　　奈良時代竪穴４、平安時代建物１

20、３と同じ　石川隆郎「古里遺跡」
　　溝４、土坑４があるが時期は明確ではない。包含層から奈良時代から室町時代の遺物出土

21、２と同じ　伊藤裕偉「南所遺跡」
　　奈良時代の建物、室町時代の建物・溝・道

22　六大B遺跡　Ｈ２～Ｈ５
『三重県埋蔵文化財センター年報２～５』三重県埋蔵文化財センター、1991.3～1994.3から
　　70棟以上の飛鳥～鎌倉時代の掘立柱建物。平安時代の建物配置には規則性が見られ、下級官衙の可能性もある。

Ｈ２年　弥生時代土坑5、
　　飛鳥・奈良時代竪穴１、建物18、井戸１、土坑７、溝11
　　平安時代建物43、井戸６、土坑５、溝７
　　鎌倉時代建物３、井戸５、土坑１、溝13
　　300点以上の緑釉、円面硯、和同開珎銀銭

Ｈ３年　飛鳥～奈良建物３・土坑３
　　平安建物５、溝１、
　　鎌倉井戸１
　　緑釉陶器、石帯

Ｈ４年　奈良・平安の掘立柱建物７棟・井戸５

Ｈ５年　鎌倉井戸２、江戸時代礎石建物４・井戸５

23　大古曽遺跡『三重県埋蔵文化財センター年報３～５』三重県埋蔵文化財センター1992.3～1994.3から

Ｈ３年　飛鳥・奈良時代建物３、土坑１、溝１
　　鎌倉時代土坑墓４、溝２

Ｈ４年　溝２

Ｈ５年
　　Ａ地区　飛鳥～奈良時代建物20、溝３、土坑１
　　平安時代溝１、円面硯４、緑釉、青磁
　　Ｃ地区　縄文時代溝、古墳時代溝
　　飛鳥～奈良時代建物・溝
　　河道から旧石器（ナイフ形石器、縦長剥片）

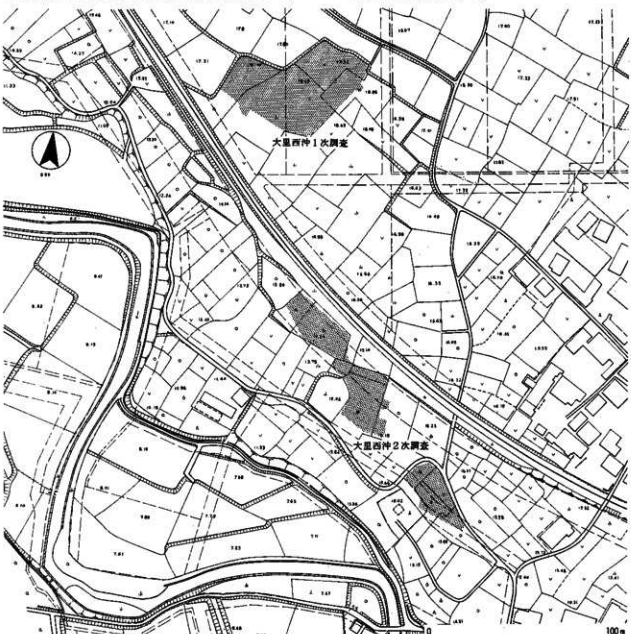
24　大垣内遺跡　『三重県埋蔵文化財センタ年報１』三重県埋蔵文化財センター1990.3より
　　奈良～平安時代の建物26棟、溝、土坑。
　　円面硯、土馬

Ⅱ　遺構

今回の調査は、平成３年度に実施した大里西沖遺跡から現ＪＲを挟んだ南側約１００mの位置にある。平成３年度に実施した調査区をＡ地区とし、今回実施した２箇所の地区を北からＢ地区・Ｃ地区として報告する。地区設定は任意の方向で、Ｂ・Ｃ地区を共通の地区割りとし、Ｂ地区西北隅を起点として長軸方向を１～38の数字、短軸方向をＡ～Ｉまでのアルファベットで地区割りを行った。なお、長軸方向の基準線は、磁北に対して33度10分西に振れている。

Ｂ地区は、南東側が標高16.2m、北西側が14.3mと約２m近くの比高差がある。Ｂ地区の南西約20mの位置にあるＣ地区は、標高約16mで、南西に向かって緩やかに傾斜する。大きく見れば南西に迫り出す台地が、Ｂ地区南側を含めて南東に一部張り出す地形である。

検出した主な遺構のうち、古墳はこれまでこの台地上にはなく、新たに確認されたために字名をとって大里西神古墳群とする。



第３図　調査区位置図　(1:2,000)

1　B地区の遺構

遺構検出面は、調査区東側の台地上面では耕土・床土直下の地表から深さ0.3mの黄色粘質土層（地山）で、西側では耕土・床土（厚さ0.3m）、茶褐色土（厚さ約0.4m）の地表から深さ約0.7mの黄褐色砂礫層・黒ボク土上面で、遺構検出面はいずれも地山に相当する。黄褐色砂礫層は西部の遺構の密集する地域にも見られ、西側中央から台地斜面まで地区には黒ボク土が見られた。

西側で見られる茶褐色土は地山の上に堆積したもので、西側調査区の土層観察の結果、鎌倉時代の溝は茶褐色土上面から切り込んでいることが確認できた。古墳時代の遺構は地山層からとなっている。

検出した遺構は、台地上では古墳時代を中心とするもので、斜面から下では奈良時代から鎌倉時代を中心とする遺構である。（第２表）

時代	遺構		
	主要遺構	土坑	溝
縄文		163	
古墳時代	1号墳 2号墳 3号墳	141・149・155・156・158・162・165・166・170・187・199	153・188
奈良	ＳＨ184 ＳＢ200～203	181・182・183 186	
鎌倉	ＳＢ204 ＳＥ171	131・132・134・136・137・143・157	135・140・142・154・167・177・179・180
室町			147・172・175・

第２表　Ｂ地区 時期別一覧表

（１）縄文時代の遺構

台地上で土坑ＳＫ163を検出しただけである。

ＳＫ163　台地上の調査区北東部にある。幅1.4～1.6m、深さ0.5mの不定形な土坑である。縄文土器の細片や黒曜石の剥片が出土している。

（２）古墳時代の遺構

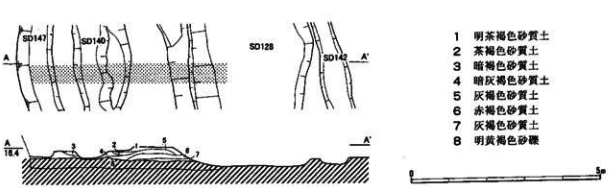
当該期の遺構が最も多く、６世紀代のもので、円墳３、土坑10、溝３がある。これらはいずれもＢ区東側の台地上で検出した。

Ａ　古墳

第１号墳（第４図）　台地上の東端で検出したＳＤ128を第１号墳の東側周溝としたもので、調査区の中央南側に隣接して現在の墓地が存在する。墓地の平面形態から見て、古墳の跡地を墓地として利用したと可能性が高い。

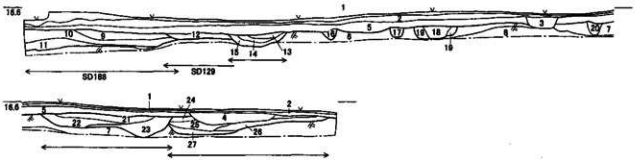
周溝は東北部を確認したもので、幅1.6～2.2m、深さ0.2mで、南側は鎌倉時代のＳＤ135が重複する。平面形態は内側が円弧を描くのに対し、外側は東辺と南辺が直線状を呈し、円墳か方墳かの判断は困難である。周辺では円墳が多く見られることから、ここでは内側の形を重視して円墳と考えておく。推定径は内々の径で16mとなる。

また、周溝内側は遺構検出面が周辺より高くなっており、溝底との比高差は0.4mある。このため墳丘盛土の可能性が考えられるため、周溝内側に向か



第４図　１号墳 墳丘盛土 土層図（1:100）

B地区　東側　南壁土層図

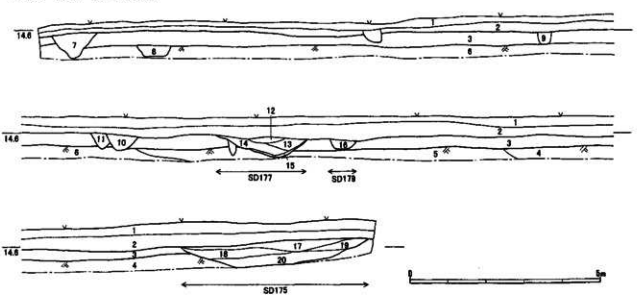


1　表土
2　床土
3　淡灰褐色粘質土（攪乱）
4　明灰褐色土（攪乱）
5　淡灰褐色土
6　明黄褐色粘質土（地山）
7　淡茶褐色粘質土（地山）
8　灰褐色砂礫（地山）
9　暗灰褐色土
10　暗黒灰粘質土　SD 188
11　暗褐色粘質土

12　灰褐色土・黄褐色粘質土ブロック混じり（SD 129）
13　淡灰褐色土
14　灰褐色土　SD 134
15　暗灰褐色土
16　淡灰褐色土
17　茶褐色土・灰褐色砂礫含む
18　黒灰色粘質土
19　暗茶褐色土
20　淡茶褐色砂質土

21　灰褐土・小礫混じり
22　淡灰褐色土・小礫混じり　SD 129
23　暗灰褐色土・小礫混じり
24　淡茶褐色土
25　明灰褐色土
26　暗黒灰色土　SD 128
27　灰褐色土・赤茶色砂質土混じり

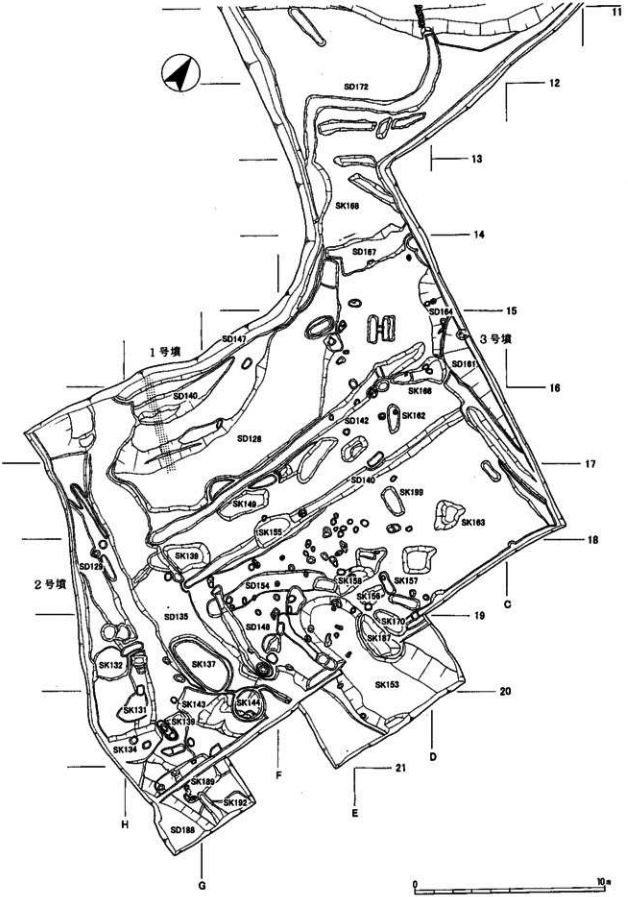
B地区　西側　北壁土層図



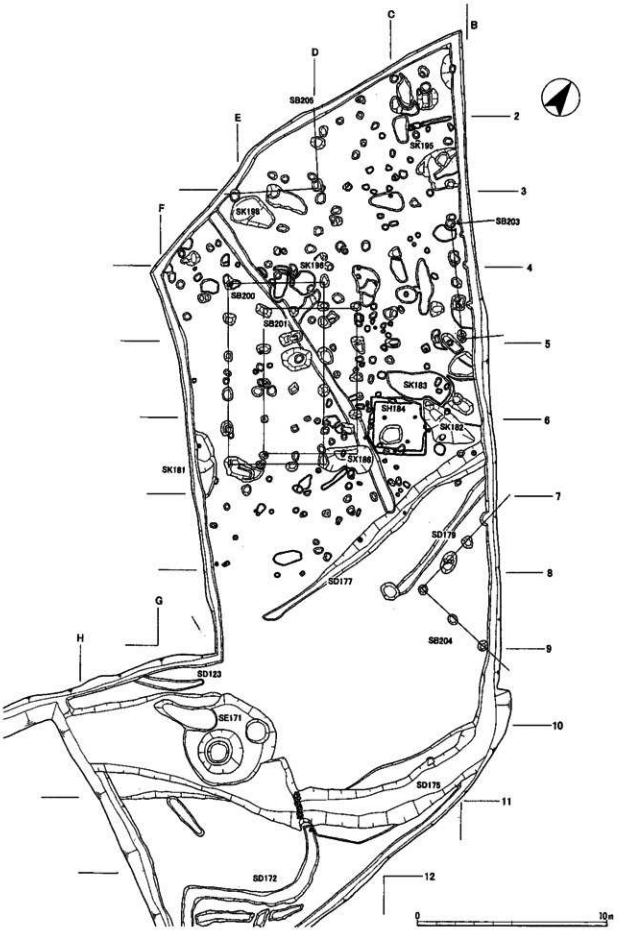
1　表土
2　旧耕土
3　明茶褐色土・黄褐色砂礫多く含む
4　暗黒灰色土（黒ボク）
5　明茶褐色砂質土　地山
6　黄褐色砂礫
7　淡茶褐砂質土
8　茶褐砂礫
9　黒灰色土
10　明黒灰色土

11　暗黒灰色土
12　黒褐色土
13　黒灰褐色土
14　黒灰色土　SD 177
15　暗灰色土
16　暗黒灰色土（SD 179）
17　明茶褐色土
18　淡茶褐色土
19　暗黒灰色土・茶褐色土混じり　SD 175
20　暗灰褐色土

第5図　B地区　土層断面図(1:100)



第6図　B地区 東側遺構平面図（1：200）



第７図　Ｂ地区 西側遺構平面図（１：２００）

って幅0．4mのトレンチを2箇所入れて土層観察を行った。土層観察の結果、トレンチ底から約0．1m上の所でレンズ状の堆積が確認できた。地山層とは異なる土質のため、墳丘盛土の可能性が高いものと考えられる。

出土した遺物は、須恵器杯・壺、埴輪などが整理箱で約1箱あり、須恵器から見て6世紀中葉の年代が与えられる。

第2号墳　1号墳の東南側にある東西溝ＳＤ129を第2号墳の北側周溝とした。ＳＤ129は、幅1～1．2m、深さ0．3mで弧状に延びる東西溝で、西南側に墳丘が想定される。1号墳周溝ＳＤ128と西側で重複が認められ、ＳＤ128より新しいことを確認した。また、東側のＳＤ188よりも新しい。

遺物は少なく円筒埴輪片が少量出土しているだけで、時期決定は難しいが、1号墳同様6世紀中葉の時期を与えておく。

第3号墳　1号墳の東北に調査区北壁部で検出した東西溝ＳＤ161・164を第2号墳の南側周溝と判断した。北壁に沿って東西に14mほど検出したが、周溝の北は調査区外に延びるため、幅は不明である。深さは北壁部で0．4mである。南側の外周は円弧状を呈しているため、円墳の可能性が高く、北側に墳丘が想定される。

出土した遺物は、須恵器杯・壺、埴輪片など整理箱で約1/6箱と少ない。須恵器から見て6世紀前半代と思われる。

B　土坑

形態的には、隅丸の長方形を呈するもので、大きさから2m前後のものと3m前後のものがある。完形の須恵器が数点据えられた状況で出土しており、骨などは確認できなかったが土坑墓の可能性が高い。いずれも調査区東側の台地上で検出している。

また、遺構番号を与えていないが、遺物の出土していない平面形の類似した土坑も台地上で集中して存在しており、集団墓の営まれた地域である可能性が高い。

ＳＫ141(第8図)　東側調査区中央南側にある南北方向の土坑で、南側上半をＳＤ135に壊される。長さ3.3m、幅1.5m、深さ0.5mで、北側が方形、南側が隅丸方形を呈する土坑である。

南側の底に近い場所で須恵器杯身・杯蓋が2セット出土した。

ＳＫ149(第8図)　ＳＫ141の北側に位置する南北方向の土坑で長さ2.8m、西側がＳＤ142に壊されているために幅1．3m以上、深さ0．5mの西側がやや膨れる隅丸方形を呈する土坑である。土坑の底には、0．2m大の礫が十数個ほど見られる。

遺物は、南側中央底上から須恵器提瓶が横転した状況で出土したほか、須恵器杯身、壺の脚部や刀子が出土した。

ＳＫ155(第8図)　ＳＫ149の東に隣接する南北方向の土坑で、中央を南北溝ＳＤ140に壊されている。長さ2.2m、幅1.3m、深さ0.4mの南西側がやや膨れる隅丸方形を呈する土坑である。

出土した遺物は、埴輪の細片が1点あるほかは緑泥片岩製の管玉が1点あるだけで、厳密な時期決定が困難である。他の土坑同様に6C代であろう。

ＳＫ156　台地上調査区中央東側に位置する南北方向の土坑である。長さ1.4m、幅1.1m、深さ0.35mの隅丸方形を呈するが、他の土坑と比較してやや小型である。

遺物は土師器の細片が出土しただけであるが、形状、埋土の状況が他のものと類似するため当該期に含めた。

ＳＫ158　台地上調査区中央東側に位置する南北方向の土坑である。長さ2.2m、幅1．1m、深さ0.5mの隅丸方形を呈する。

遺物はほとんど出土していないが、形状、埋土の状況が他のものと類似するため当該期に含めた。

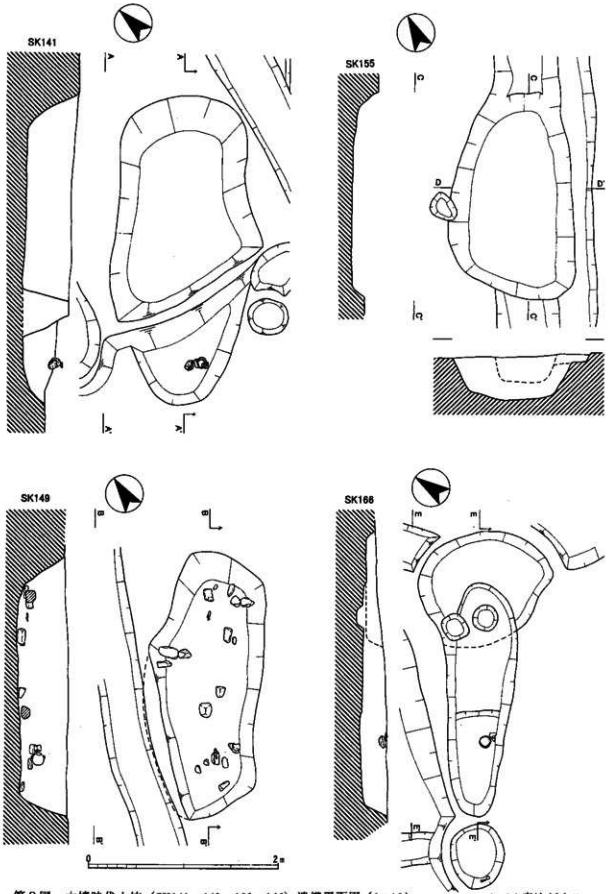
ＳＫ162　台地上調査区中央北側に位置する東西方向の土坑である。長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.25mの隅丸方形を呈する。

遺物は、須恵器壺の底部片が1片出土したで、厳密な時期決定が困難であるが他の土坑同様に6C代であろう。

ＳＫ165　第3号墳西側にある東西方向の土坑である。長さ1.8m、深さは0.1m、北半は調査区に伸びるために幅については不明である。

遺物は、須恵器片が出土しただけで時期決定は困難であるが、形状から当該期に含めた。

ＳＫ166(第8図)　ＳＫ165の東側にある南北方



第８図　古墳時代土坑（SK141・149・155・166）遺構平面図（1:40）　　レベル高は 16.4 m

第９図　ＳＫ170遺構平面図（1:40）

向の土坑である。長さ2．5m、幅0.7m、深さ0.2mの楕円形で、北側は他の遺構で上半が壊されて底がわずかに残存していた。

遺物は南側の上面で須恵器ほぼ完形の杯身と杯蓋の破片が出土した。

ＳＸ170(第*図)　ＳＫ156の東に隣接する東西方向の土坑である。長さ1.9m、幅0．8m、深さ0.6mの楕円形を呈する。土坑内の東側には、須恵器の大甕が口縁を東に向けて横に据えられていた。

須恵器甕は体部最大径が0．6mと土坑の幅とほぼ同じ大きさである。大甕は底部を打ち欠いて使われており、別個体の須恵器甕の体部片が底部を塞ぐように置かれていたほか、口縁にも別個体の須恵器甕の体部片が立てられており、蓋を意識して使われていたようである。このような遺物の出土状況から、須恵器甕を利用した土器棺墓であると考えられるが、内部からは遺物や骨は確認されていない。

ＳＫ187　ＳＫ170の南にある東西方向の土坑である。長さ2.6m、幅1.05m、深さ0.3mで、平面形は、いびつな楕円形を呈する。遺物は須恵器が少量出土しただけであるが、形状、土層が他のものと類似するため当該期に含めた。

ＳＫ199　ＳＫ162の南側にある東西方向の土坑で、長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.2mの方形を呈する。遺物は出土していないが、形状、土層が他のものと類似するため当該期に含めた。

C　溝

溝は台地上で２条確認している。いずれも一部を検出したのみで、全貌の判明するものはなく、規模的にも古墳の周溝の可能性が高いものである。第１～３号墳の占有する位置との関係から、どのような古墳を想定するかは困難なため、ここでは溝として報告する。

ＳＤ153　調査区東端中央で検出したもので、ＳＫ187より古い。調査区東側に伸びるため、東側に一部拡張した。長さ８m以上、幅5.3m、深さ0.3m、溝の先端は丸く終わっている。

平面形態は逆弧状に北側に向かっているが、古墳の南側周溝と考えると西側周溝が確認できないことや北側の２号墳との占有関係から、古墳の周溝であると断定できなかった。

遺物は、埴輪が整理箱で約２箱出土しており、土師器・須恵器の出土は少ない。埴輪は大半が円筒埴輪だが、人物埴輪・家形埴輪などの形象埴輪が整理箱で約２箱ある。須恵器などから見て、６世紀前半には埋没している。

ＳＤ188　調査区東南端に位置する東西溝で、調査区の東側を一部拡張したが、溝の北肩のみしか確認できなかった。深さ0.4mで、埴輪や須恵器などが整理箱で１箱出土した。土層断面観察から２号墳の周溝ＳＤ129 より古いことを確認したほか、遺物から見て６世紀中頃のものである。

3　奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は、すべて斜面下の調査区西側で検出したが、竪穴住居１棟、掘立柱建物４棟のほか土坑３基がある。

A　竪穴住居

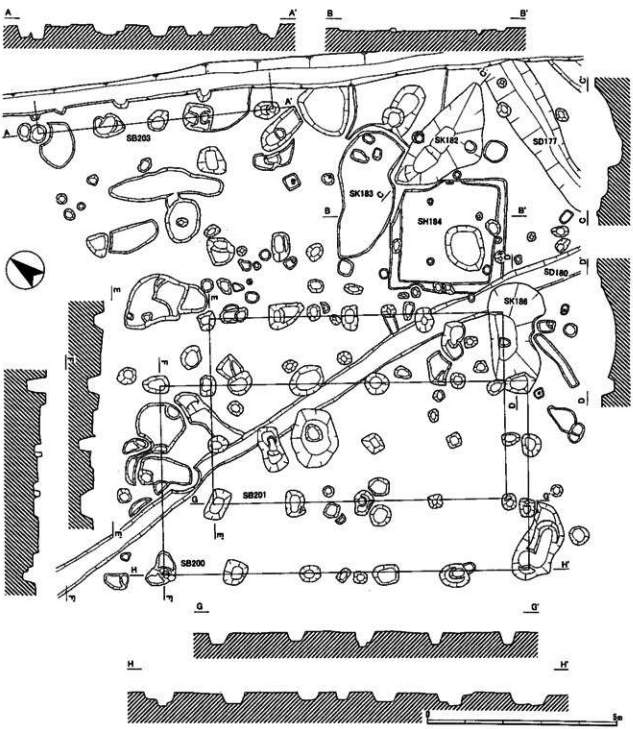
ＳＨ184（第10図）　西側調査区にある一辺3.0mの方形を呈する竪穴住居である。深さは0.05mと残りは非常に悪い。幅0．2m、深さ0.05mの周溝が巡る。周溝は北東側中央部で一端途切れているのが確認できる。竪穴住居の北東隅はＳＫ182・183に壊されているが、周溝が同様に存在していたものと想定できる。この途切れた部分では、焼土などの痕跡は

確認できなかったため、カマドは造られていない可能性が高いものと考えられる。

また、床面を精査した結果、径0.2m、深さ0.1mの円形を呈する柱穴を幾つか検出したが、竪穴に伴う柱穴かどうかは不明である。

遺物は、土師器甕を少量出土しただけで、明確な時期は決定できなかった。土師器甕は、飛鳥～奈良時代にかけての特徴を有しているものとしか判断出来なかった。

ＳＨ184 より新しいＳＫ183 は奈良時代前半に比定でき、このことから竪穴住居の年代は、飛鳥～奈良時代の前半までと考えられる。しかしながら、周辺で出土した遺物には７世紀の遺物がほとんどないため、ここでは土坑と同じ時期と考えておく。



第10図　Ｂ地区 調査区西側遺構平面図（1:100）　レベル高は 14.4 m

B　掘立柱建物

ＳＢ200（第10図）　ＳＨ184の南側に位置する５間×３間の東西棟建物である。柱掘形は径０．６mの楕円形で、深さは０．４mである。柱間は桁行1.95m、梁行1．８m等間で、建物の方向は北に対して約39度西に振れる。

柱穴内から出土した遺物は少なく、時期決定は困難であるが、奈良時代後半から平安時代初めにかけての土師器片と思われるものが出土しているが、ここでは奈良時代の年代を与えておく。

ＳＢ201（第10図）　ＳＢ200と位置的に重複する場所で検出した４間×３間の東西棟建物である。東側梁行柱列の北から２番目の柱穴がＳＢ200の柱穴と重複しており、ＳＢ200より新しいものと判断した。柱掘形は径0.6mの楕円形で、深さは0.3mである。柱間は桁行1.8m、梁行1.8m等間で、建物の方向は北に対して約39度西に振れる。

出土した遺物は、ＳＢ200同様に少ないが、当概期に含めた。

ＳＢ202　ＳＢ100の西側にあり、調査区外に延びるため棟方向は不明であるが、棟方向がＳＢ200と揃うことから東西棟建物の可能性が高い。柱掘形は径0.7mの隅丸方形で、深さは0.5mである。柱間は桁行2.4m、梁行2.1m等間で、建物の方向は約39度西に振れる。

出土した遺物は少ないが、棟方向がＳＢ200と揃うことから同時期とした。

ＳＢ203（第10図）　ＳＢ200の北側にある東西４間で北側調査区外に延びる。柱掘形は径0.5～0.7mの隅丸方形で、深さは0.3mである。柱間は桁行2.0mで、建物の方位はＳＢ200などとは少し異なり北に対して約46度西に振れる。

C　土坑

ＳＫ181　西側調査区中央南側にある楕円形の土坑で、東南北3.5m、深さは南側が0.15mで北側が深くなり0.3mとなる。西側は調査区外に伸びるため規模は不明である。

遺物は土師器甕、須恵器杯・甕の小片がわずかに出土しただけである。土師器甕は長胴甕で奈良時代の範疇に入るもので、須恵器は６世紀のもので混入と思われる。

ＳＫ182（第10図）　ＳＨ184と重複するもので、古いものからＳＨ184→ＳＫ183→ＳＫ182であることを確認した。東西3．3m、南北1.8m、深さ0.6mの三角形状を呈する土坑である。

遺物は土師器皿・杯の小片と、貨幣７点を出土した。癒着しているが和同開珎であることが破損した一部から読みとれる。

ＳＫ183（第10図）　東西3．1m、南北1.4m、深さ0.1mの浅い楕円形を呈する土坑である。

遺物は、奈良時代の土師器甕と皿と思われる小片をわずかに出土した。

ＳＫ186(第10図)　竪穴住居ＳＨ184の南東に位置する東西2．9m、南北1.5m、深さ0.4mの楕円形を呈する土坑である。埋土には焼土を含んでおり、遺物は土師器杯・椀を出土したほか、土師器甕や須恵器の杯の小片を少量出土しただけである。掘立柱建物のＳＢ200の柱穴より古い。

（４）鎌倉時代

A　掘立柱建物

ＳＢ204（第11図）　西側調査区の東北部にある東西２間以上、南北３間以上で、棟方向は調査区外に延び不明である。柱掘形は径0．5mの円形で、深さは0.3mである。柱間は南北1.8m、東西2.1mで、建物の方位は西側の建物群とは大きく異なり、北に対して１度東に振れる。

B　井戸

ＳＥ171(第13図)　調査区中央の斜面下に作られた井戸で、ＳＤ170より古い。遺構検出面では径4.5m、深さ0.4mと浅く、その底で径は2.4m、深さ１mの円形の土坑を検出した。土坑の底は、さらに径1.2m、深さ0.3mと一段深くなっていた。

埋土には人頭大の礫が混入していた。また、最下層には木片が若干残っており、井戸枠が据えられていたものと思われる。

出土した遺物は、土師器皿や山茶椀などが整理箱で１箱に満たない。遺物から13世紀後半の時期と考えられる。

C　土坑

２号墳が位置する調査区南西部で、当概期の土坑が多数確認できた。遺物とは別に骨片も多くの土坑

で認められるため、火葬墓の営まれた地域である可能性もある。

ＳＫ131　２号墳周溝と重複する「くの字」状に折れ曲がる長さ2.0m、幅1.2m、深さ0.1mの土坑である。埴輪片のほか、中世土師器皿片や骨片が少量出土した。

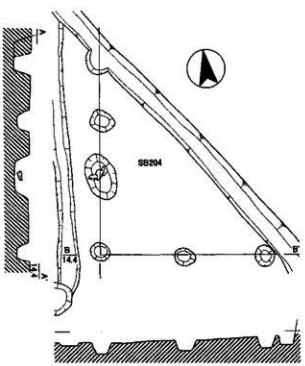
ＳＫ132　ＳＫ131の西にある径1.7m、深さ0.1mの円形を呈する土坑である。埴輪片や須恵器しか出土していないが、骨片が認められることから中世の土坑墓の可能性が高い。

ＳＫ134　ＳＫ131の東側にある調査区外に延びる長さ2.5m以上、幅1.8m、深さ0.3mの楕円形を呈する土坑である。

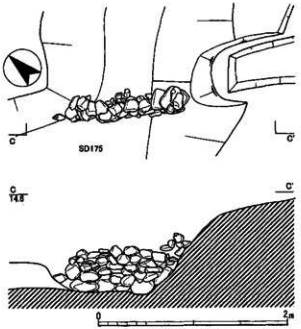
須恵器甕や埴輪片が出土したが土層断面の切り込み面から見て中世のものと判断した。

ＳＫ136　ＳＫ132の西にある径1.0m、深さ0.8mの円形を呈する土坑である。骨片が出土することから新しいものと判断した。

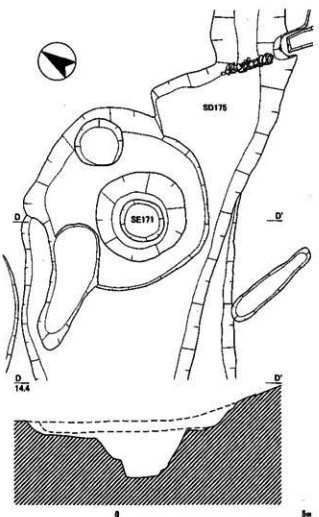
ＳＫ137　ＳＫ132の北にある長さ3.4m、幅1.5m、深さ0.1mの楕円形を呈する土坑である。東西溝ＳＤ135より新しい。埋土には骨片を多く含み、人頭大の礫が中央に多くあり、貨幣のほか五輪塔が東側で２点出土した。



第11図　ＳＢ204遺構平面図（１：１００）



第12図　ＳＤ175石組遺構平面図（１：４０）



第13図　ＳＥ171遺構平面図（１：１００）

ＳＫ143　ＳＫ137の南にある調査区外に延びる長さ４ｍ以上、幅2.1ｍ、深さ0.2ｍの溝状を呈する土坑である。須恵器甕や土師器甕などを出土しているが、埋土の状況から見て新しいものと判断した。

ＳＫ157　調査区東端の中央にある長さ1.25ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.3ｍ長方形を呈する土坑である。出土した遺物には、山茶椀・刀子等があり13世紀後半の遺構と考えられる。

Ｄ　溝

ＳＤ135　台地上の調査区南にある幅2.5ｍ、深さ0.6ｍで、溝の平面形態は北西端が西に、南東端が南に円弧を描く形で検出した。

出土した遺物は、須恵器杯、形象埴輪など古墳時代の遺物が多く含まれており、整理箱で約１箱ある。しかしながら、山茶椀の細片が１点含まれることや、古墳時代の１号墳周溝ＳＤ128より新しく、鎌倉時代のＳＫ137・143より古いことから当概期に含めた。直行するＳＤ140・142などの溝がＳＤ135の所で途切れることなどからＳＤ140・142と同時期と考えた。なお、完形の須恵器杯身・杯蓋は、重複する位置にあるＳＫ149の混入の可能性もある。

ＳＤ140・142　ＳＤ135中央から北側に延びる溝で、東側にあるＳＤ140は幅0.6～0.8ｍ、深さ0.3ｍ、西側にあるＳＤ142は幅0.8～1.0ｍ、深さ0.3ｍの溝で、溝間は約３ｍある。いずれも古墳時代の遺物が多く出土しているが混入と考えられ、ＳＤ135と直行することから同時期とした。

ＳＤ167　調査区中央にある１号墳周溝ＳＤ128の北側にある南北溝で、周溝より新しい。幅1.4ｍ、深さ0.2ｍで、遺物は少ないが当概期の遺物が出土している。

ＳＤ180　調査区北側の斜面下にある幅0.6ｍ、深さ0.1ｍの東西溝である。東端は途切れ、ＳＤ177と直行する。平安時代のＳＫ186より新しい。出土した遺物には山茶椀、土師器小皿などがある。

ＳＤ177　東西溝ＳＤ180と直交する幅0.5～１ｍ、深さ0.25ｍの南北溝である。遺物は山茶椀や土師器皿などが出土した。

ＳＤ179　ＳＤ177の東側にある幅0.6ｍ、深さ0.1ｍの南北溝である。遺物は土師器片が出土しただけで、時期を限定できないが、掘立柱建物ＳＢ204の桁柱方向と揃うことや柱筋から約１ｍと等間隔に離れていることから雨落ち溝の可能性も残る。

（５）室町時代以降

この時期の遺構は少なく、斜面下のＳＤ175やＳＤ175に落ち込むＳＤ172がある。

ＳＤ172　台地上から斜面を屈曲しながら流れる幅0.6ｍ、深さ0.2ｍの溝である。斜面下のＳＤ175に取り付くため、同時期と考えた。

ＳＤ175（第12図）　斜面下にある深さ0.2ｍの蛇行する溝で、井戸ＳＥ171より新しい。西側では幅が４ｍと広いのに対して、東側は３ｍと狭くなる。

狭くなる場所では人頭大の礫が溝底から積まれているのが確認できた。溝を堰き止めるように積まれているものの、礫だけでは構造的に自立できないと考えられるが裏込め土などについては確認できていない。西側が面を揃えているため、なんらかの構造材の性格を持つものと思われるが、性格については不明と言わざるを得ない。

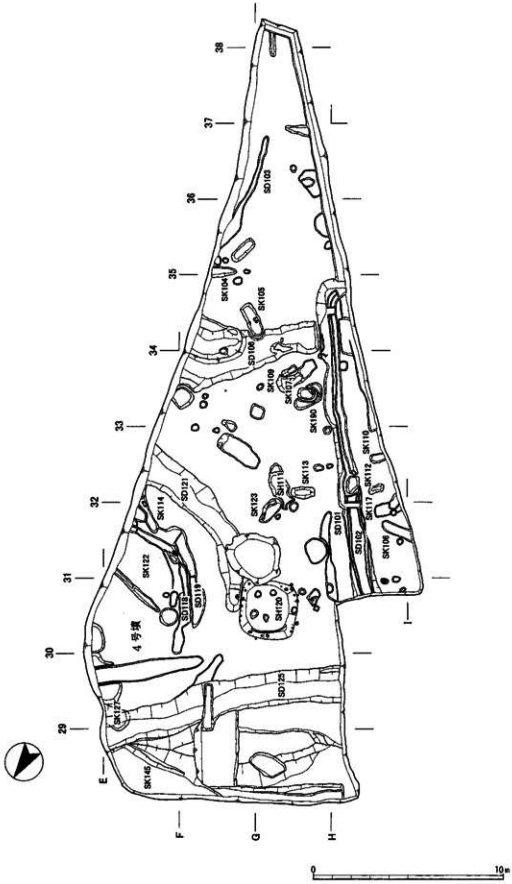
溝の埋土からは、山茶椀から陶器までが出土しており、室町時代には埋没している。

２　Ｃ地区の遺構

層位は、耕土が0.2～0.3ｍあり、遺構検出は、表土から深さ約0.5ｍ下の黄褐色粘質土層で行った。

検出した遺構は、縄文時代・古墳時代と鎌倉・室町時代の大きく分けて２時期のものがある。西壁の断面観察の結果、近世の遺構ＳＤ101等は、耕土下の暗茶褐色土から切り込んでいるが、鎌倉・室町時代の切り込み面については確認できていない。

また、調査区北側には土手状の高まりが認められ、表土のみを除去して遺構検出を行った結果、北側でも土手に併走するＳＤ145を確認することが出来た。また、断面観察の結果、土層№８の下部（図15▲）からガラス片を確認することが出来たため、土層№



第14図　C地区遺構平面図（1：200）

8～10（盛土）は新しく、ＳＤ125、ＳＫ126も近代に属するものと判断できた。しかしながら、土層No.11～13は南側の盛土と同一かどうか判断できないこと、北側のＳＤ145が室町時代の遺構と判断できることなど、盛土の性格については不明と言わざるを得ない。

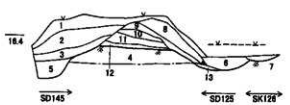
（1）縄文時代の遺構

ＳＨ120（第16図）　調査区北側にあり４号墳の周溝ＳＤ121に東側の一部を壊される。東西3.0m、南北3.1mの隅丸方形を呈し、深さは中央の深い所で0.25mで、壁面は緩やかに傾斜する。壁面には径0.1mほどの小穴が多数検出でき、屋根材を支える壁柱穴と思われる。出土した遺物は少ないが、縄文土器が出土しているが、細片のため時期を限定出来ない。

時代	遺構		
	主要遺構	土坑	溝
縄文	ＳＨ120		
古墳時代	４号墳	105・109～112・117	106
鎌倉		114・122	118・119
室町			145

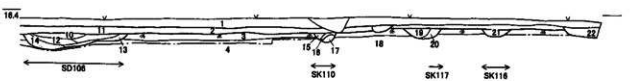
第３表　Ｃ地区 時期別一覧表

Ｃ地区　北側盛土　土層図



1　表土①
2　表土②
3　表土③
4　黄褐色砂質土・小礫混じり（地山）
5　暗灰色土（ＳＤ145）
6　黒色土（ＳＫ126）
7　黒灰褐色土（ＳＤ125）
8　黄褐色砂質土・小礫混じり
9　暗灰褐色土・黄色土混じり
10　黄褐土・灰色土混じり
11　暗灰褐土
12　黄褐色土
13　黒灰色土
盛土

Ｃ地区　西壁土層図



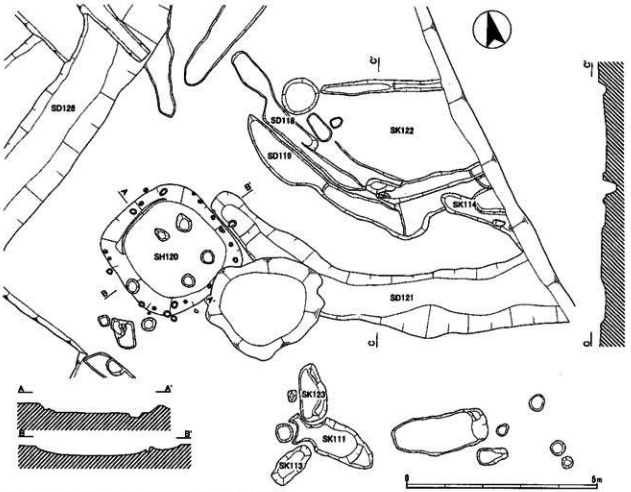
1　表土
2　黒褐色土（包含層）
3　暗茶褐色土（地山）
4　黄褐色粘質土（地山）
5　灰黄褐色砂礫（地山）
6　暗灰褐色土（ＳＤ102）
7　灰褐色土
8　暗灰色土
9　灰褐色砂質土
ＳＤ101

10　黒灰褐色土
11　灰茶色土
12　暗灰色粘質土砂混じり
13　黒褐色土
14　黒灰色土
15　黒灰色土
16　暗黄褐色土
17　暗灰褐色土
18　黒灰褐色土
ＳＤ106

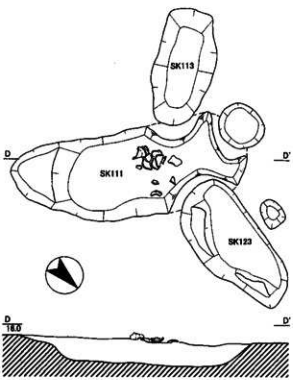
19　黒色土・黄灰色土混じり
20　黒灰褐色土（ＳＫ117）
21　黒灰色土（ＳＫ116）
22　暗灰色土
ＳＫ110

0　5m

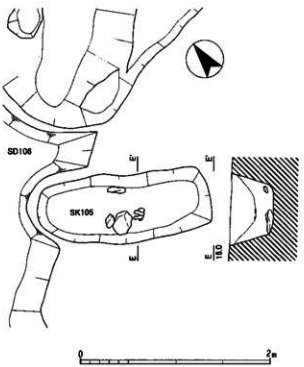
第15図　Ｃ地区土層図（１：１００）



第16図　C地区 北側遺構平面図（1：100）



第17図　SK 111遺構平面図（1：40）



第18図　SK 105遺構平面図（1：40）

（2）古墳時代の遺構

４号墳（第16図）　調査区北東部にあるＳＤ121を４号墳の南側周溝とした。周溝は西側で一旦途切れ、北側は近代の溝ＳＤ125に壊されているが、重複する所は円弧状を呈しているため、周溝の痕跡を若干残しているものと思われる。東半分は調査区外に延び、推定径は溝の内々で径で約12mの円墳である。溝の規模は幅1.8m、深さ0.2mで、途切れた西側に向かって浅くなり、ＳＤ125に壊されているが溝の続きの痕跡が認められる。

遺物は須恵器・土師器・円筒埴輪などが整理箱で１箱に満たない。遺物から見て６世紀前半の古墳と考えられる。

土坑　長方形の形をした土坑が多く見られ、中にはＳＫ110・112のように円筒埴輪が使用された土器棺墓があり、遺物の出土していないものも土坑墓の可能性が高いと考えられる。

ＳＫ105（第18図）　調査区南にある東西方向の土坑である。長さ1.8m、幅0.7m、深さ0.3mで、ＳＤ106より新しい。

遺物は、馬具が出土したのみである。馬具はｆ字形鏡板付き轡で、出土位置が土坑の底から0.15m上にあるため、埋納当初の形を表しているのではなく、陥没したために上から落ち込んだ可能性が高いと思われる。土器類は出土していないため時期を確定することが困難であるが、馬具は形式から見て５世紀後半まで遡るものと考えられるが、周辺の土坑の年代が６世紀代と考えられているため、当土坑も６世紀代と考えるのが良いだろう。

ＳＫ109　ＳＫ105の西側にある南北方向の土坑で、長さ2.4m、幅0.8m、深さ0.2mの長方形を呈する。遺物は埴輪片を少量出土した。

ＳＫ110（第19図）　ＳＫ109の西側４mほどの所にある南北方向の土坑である。南側は調査区外に延びるため、長さは0.8m以上で、幅0.5m、深さは遺構検出面では0.2mであったが、調査区西壁土層断面では本来の検出面から0.25mの深さであることが確認できる。

土坑内には、横に転倒させた円筒埴輪が見られるが、上半は耕作などで壊されて残存していない。ＳＫ112のように底部と口縁部に別個体の埴輪片で蓋をしているものと考えられるが、原位置を保っているものは少ない。

ＳＫ111（第17図）　ＳＤ121の南にある東西方向の土坑である。長さ0.95m、幅0.4m、深さ0.35mの長方形でＳＫ114や近代のＳＫ113より古い。上面から須恵器広口壺が出土しており、６世紀前半に比定できる。

ＳＫ112（第19図）　ＳＫ110の北にある東西方向の土坑である。長さ0.9m、幅0.45m、深さ0.2mで、土坑内にほぼ完形の埴輪を横転させて置いていた。口縁部と底部には、蓋として別個体の埴輪片を直立させている。

ＳＫ117　ＳＫ112の西にある東西方向の土坑である。幅0.7m、深さ0.1mで西側は調査区外に延びる。須恵器杯身の破片が出土しており、６世紀中頃の遺構と思われる。

ＳＤ106　調査区中央を東西に延びる溝である。幅1.5～2.5m、深さ0.3mで、東南側は他の遺構によって壊されているが、調査区東端で東方向に折れ曲がる様相を呈しており、円墳の周溝の可能性も考えられる。16m離れた調査区南端までに対応する溝が検出されないことから、16m以上の古墳か、あるいは周溝は削平を受けている可能性も残っているが、ここでは東西溝として報告しておく。

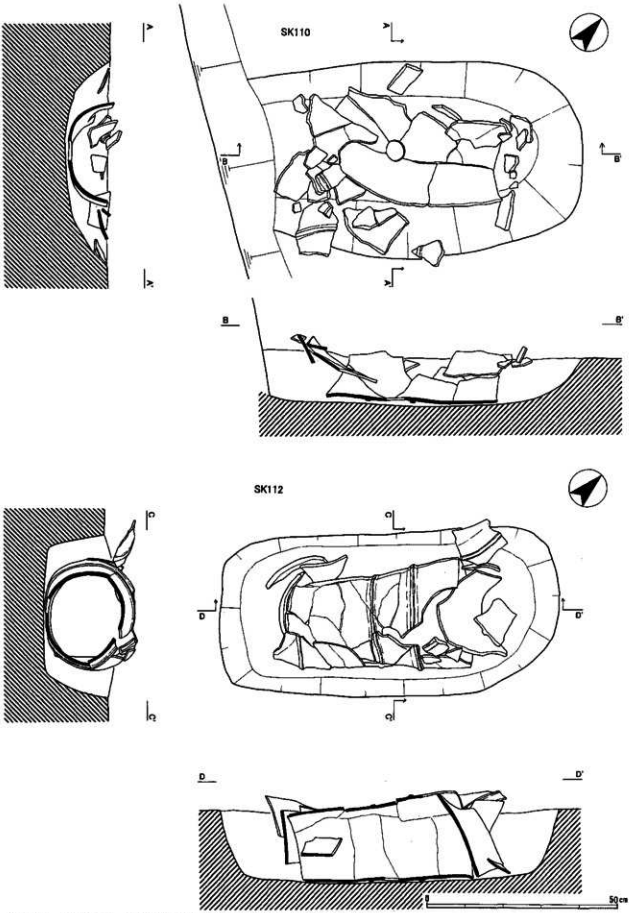
遺物は須恵器・土師器などがあり、奈良時代の遺物も含まれている。これは、調査時点で新しい土坑との遺物を選別できていないためと思われ、古い遺物から見て古墳時代の溝としておく。

（3）鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は少なく、４号墳の削平された墳丘部でＳＫ114やＳＫ122などがあるほか、幅1.0mほどの重複する溝ＳＤ118・119があり、出土した遺物は少ないが、当概期と考えられる。

（4）室町時代以降の遺構

当初に述べたように調査区北端のＳＤ145が室町時代の遺構と考えられるほか、ＳＤ101・102などは近世のものである。　（泉　雄二）



第19図　ＳＫ110・112遺構平面図（１：１０）レベル高は15.8 m

Ⅲ　遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナで35箱ある。このうち、古墳時代の遺構にともなう須恵器や埴輪類などの遺物が多い。また、古墳時代の馬具や和同開珎などが注目される遺物と言える。

1　縄文時代の遺物

ＳＫ163出土遺物（１～２）

凹線様の太い沈線で施文された土器である。中期後葉の所産であろう。

包含層等出土遺物（３～14）

包含層や、明らかに後世の遺構に混入していた縄文時代遺物を一括した。３～５は前期から中期初頭、６～12は中期後葉、13は中期末～後期に属すると思われる。14は磨石である。

2　古墳時代の遺物

１号墳周溝出土遺物（15～23）

須恵器有蓋高杯蓋（15）・高杯脚部（16）・杯蓋（17～18）・杯身（19～20）・壺（21）・提瓶（22）・短頸壺（23）がある。概ね６世紀中葉以降の所産であろう。

２号墳周溝出土遺物（24～28）

すべて円筒埴輪である。最も残りの良い27は２突帯３段構成で、底部は淡輪技によって製作され、第２段目に円透が穿たれている。突帯は極めて低い。調整は、一次調整のタテハケ後、二次調整にＢ種ヨコハが施されるが、第１段は二次調整が省略されている。

ＳＫ111出土遺物（29～30）

土師器甕（29）と須恵器壺（30）があるが、29は小片であり、混入の可能性もある。須恵器壺は、肩部が張ってラッパ状に開く口縁部をもつ。

ＳＫ112出土遺物（31～34）

埴輪棺を構成する円筒埴輪である。２突帯３段構成で、底部は淡輪技法を採り（31）、低い突帯やタテハケ後Ｃ種ヨコハケの外面調整、内面ヨコハケ、後円部外面のヨコナデなど均質性が高い。

ＳＫ117出土遺物（35）

須恵器杯身である。立ち上がりが弱く、シャープさもない。

ＳＫ141出土遺物（36～38）

須恵器杯蓋（36）と杯身（37～38）である。37と38は、立ち上がりの長さにやや差異があるが、全体的な法量や立ち上がり角度は近似する。

ＳＫ149出土遺物（39～41）

須恵器提瓶（39）、杯蓋（40）、杯身（41・42）がある。杯身の法量が全く異なるなど、やや所属時期に幅がある遺物群と思われる。

ＳＫ153出土遺物（43～93）

朝顔形埴輪（43～50）、円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪（51～61）、形象埴輪（62～81）、須恵器（82～91）、土師器（92・93）があり、大里西神遺跡出土古墳時代遺物の中で最も豊富な出土量を誇る。

朝顔形埴輪は、口縁部の開き、壺部の膨らみがともに弱い（ただし43は復元よりもう少し口縁部が開く可能性がある）。

51～58は、体部片のため朝顔形と普通円筒のいずれに帰属するかが問題となるが、確認できる口縁部がいずれも朝顔形であることと、本遺跡の普通円筒の突帯が低平であるのに対し本例では高く突出したものであることから、朝顔形埴輪の体部片の可能性が高いと思われる。いずれにしても、確認できる底部（59～61）はすべて淡輪技法で製作されている。

形象埴輪は、馬形埴輪（62～73）、人物埴輪（75～79）、不明（74・80～81）がある。このうち、馬形埴輪は、先窄りの円筒形の先端を円形粘土板で閉塞して頭部としたもので（63）、タテ髪は断面Ｔ字形を呈する（62）。鐙板や頸絡（63）、鎧（67）をはじめ全体に竹管文による装飾を多用している。

人物埴輪は、鉢巻と美豆良の剥離痕が残る78が男性で、馬形埴輪との共伴から馬を曳く人物の可能性がある。79は粘土板を整形したもので、女性人物の髻部分であろう。75～77は腕で、中空形態をとる。

不明埴輪は、底面に剥離痕があって中実でキノコ

状の形態をとる74と、細長い板状に楕円形の接合面がみられる80～81がある。

須恵器には、杯蓋（82～83）、杯身（84）、高杯脚部（85）、平瓶口縁部（86～87）、壺（88～91）がある。全体として、６世紀前葉以降の所産であろう。

土師器には、丸窓付きの甕（92）とＳ字甕（93）がある。丸窓付甕はハケ調整のく字形口縁で、球形の体部形態をとる。Ｓ字甕は、口縁部のヨコナデを１回に省略して形態的にく字形口縁化した退化形態を示す。

ＳＫ155出土遺物（94）

管玉である。穿孔幅は一定しない。

ＳＫ162出土遺物（95）

須恵器の筒形器台脚部である。長方形透孔が直列に穿たれる。

ＳＫ166出土遺物（96～97）

須恵器有蓋高杯蓋（96）と杯蓋（97）である。杯蓋は天井部と口縁部の境が沈線化している。

ＳＫ170出土遺物（98・105）

須恵器高杯形器台（98）と大甕（105）である。器台は小振りで長方形透孔が穿たれ、波状文で装飾されている。大甕は、口縁上段に２段の波状文、下段にカキメ、卵形の体部に平行タタキを施したもので、底部は重みで潰して平底形態を呈する。

ＳＤ178出土遺物（99）

馬形埴輪の破片と思われるが、破片資料での出土であり、混入の可能性もある。

包含層出土遺物（100～104・106～119）

明らかに後世の遺構に混入していた古墳時代遺物も包含層遺物として一括している。馬形埴輪（100～101・106～107）、人物埴輪（102～104）、朝顔形埴輪（108）、円筒形もしくは朝顔形埴輪（109～113）、須恵器杯蓋（114～115）、杯身（116～117）、高坏脚部（118）、小壺（119）がある。

馬形埴輪は、101は尻尾部分の破片と推定されるほか、泥障部分と思われる100を含めていずれも竹管を多用したものでＳＫ53出土の馬形埴輪と同一個体の可能性を示す。人物埴輪は、顔（102）、耳部（103）、女性装装状衣の左脇部（104）がある。朝顔形埴輪と思われる112は、胴部の膨らむ歪んだ形態をとる。

須恵器では、117が破片ながら激しい焼け歪みを受けており、近傍に須恵器窯が存在している可能性を提起する。（穂積 裕昌）

3　奈良時代以降の遺物

ＳＤ106出土遺物（120）

土師器杯があるが、重複した新しい遺構のものと思われる。古墳時代まで遡る遺物とは考えられなく、奈良時代の範疇と考えた。

ＳＫ182出土遺物（121）

土師器の皿である。内面のヘラミガキについては不明である。形態から見て、奈良時代でも古くは考えられない。奈良時代の後半か。

ＳＫ186出土遺物（122～124）

土師器杯（123）は、内外面を丁寧にヘラミガキする作りの丁寧なものに対して椀（124）は作りの粗いものである。厳密な時期決定は困難であるが、奈良時代の後半代か、

ＳＫ181、ＳＨ184出土遺物（125・126）

いずれも土師器甕で、飛鳥から奈良時代を通じて見られる器種であるため、時期決定は困難なものである。

ＳＫ122出土土器（127）

土師器小皿である。小片であるが鎌倉時代のものと考えられる。

ＳＥ171出土土器（128～134）

土師器では小皿（128・129）・鍋（130）があるほか、山茶椀（131～133）、陶器壺(134）がある。時期的に鎌倉時代と比定できる。

ＳＫ136出土土器（135）

鎌倉時代の山茶椀である。

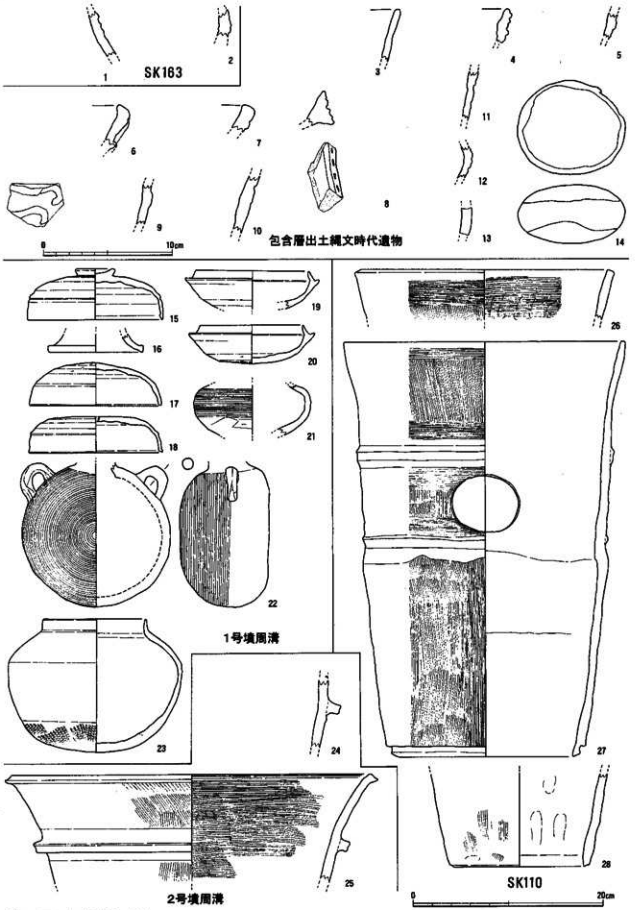
ＳＤ145・175出土土器（136・137）

136は陶器甕の口縁部、137は土師器鍋で室町時代のものである。

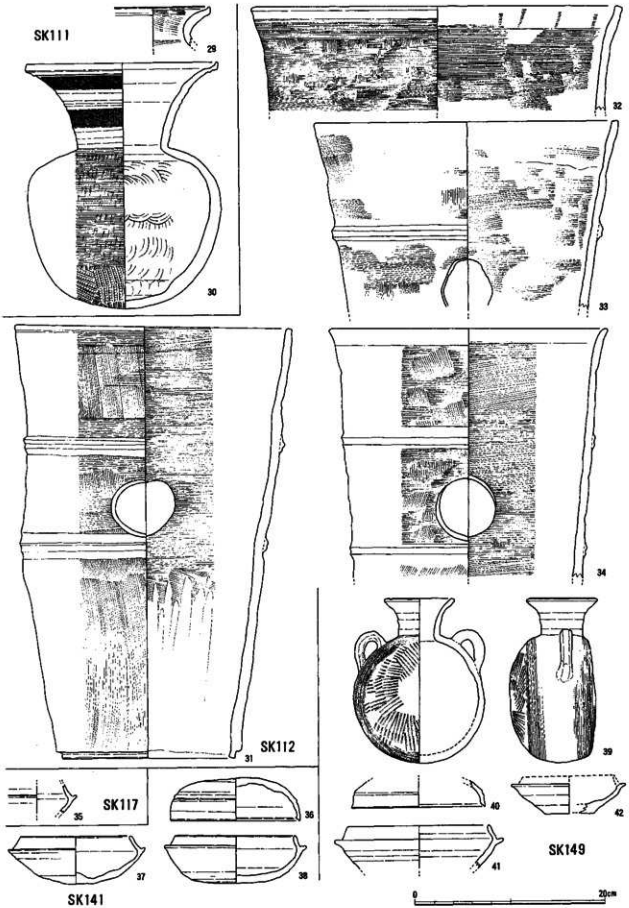
ＳＫ137出土遺物（138・139）

五輪塔で138が火輪、139が水輪である。

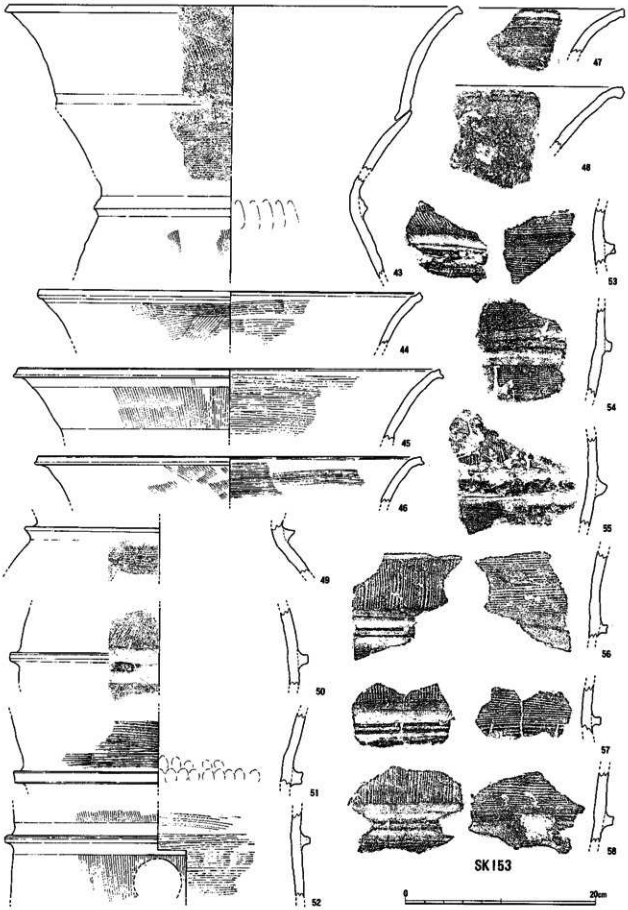
（泉 雄二）



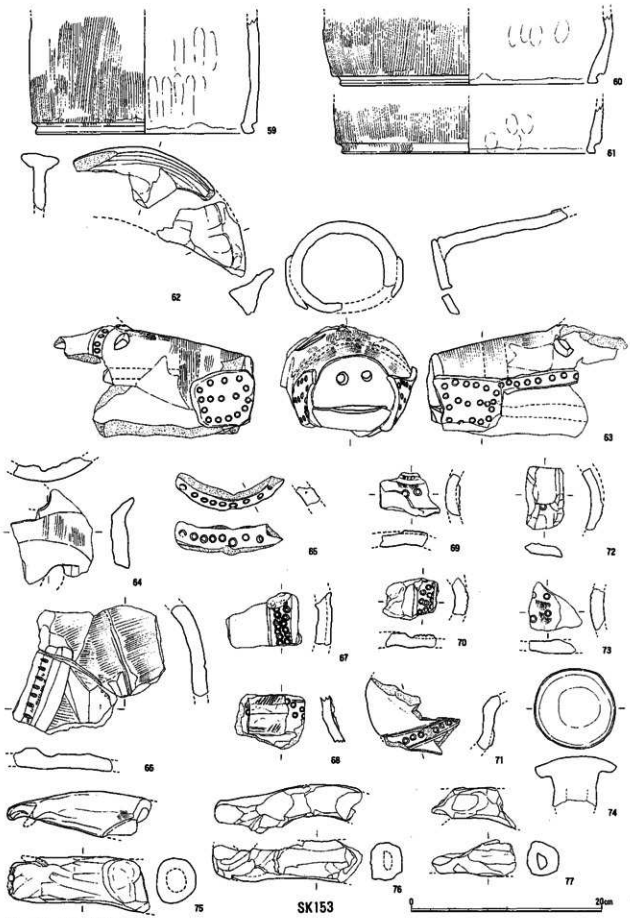
第20図　出土遺物（1）


SK111
29
30
32
33
31
SK112
34
35
SK117
36
37
38
SK141
39
40
41
42
SK149
0
20cm

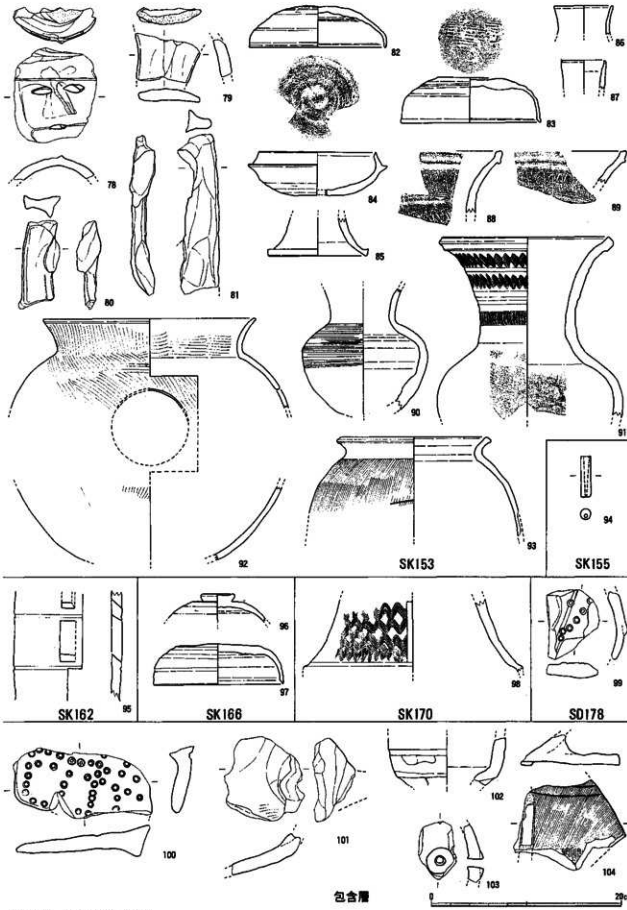
第21図　出土遺物（2）



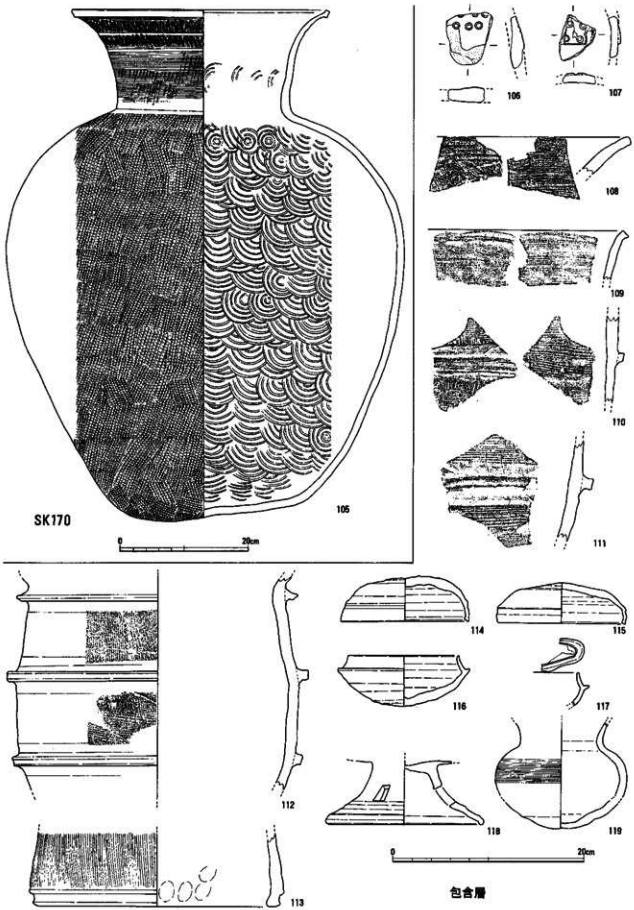
第22図　出土遺物（3）



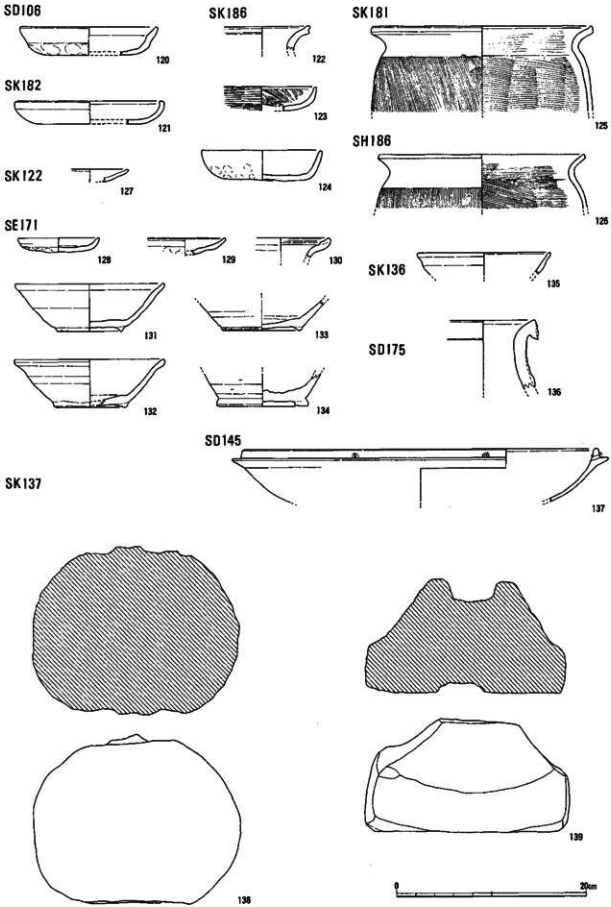
第23図　出土遺物（4）


78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
SK153
94
SK155
95
SK162
96
97
SK166
98
SK170
99
SD178
100
101
102
103
104
包含層
0
20cm

第24図　出土遺物（5）


SK170
105
0
20cm
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
0
20cm
包含層

第25図　出土遺物（6）


SD106
120
SK182
121
SK122
127
SE171
128
129
130
131
132
SK186
122
123
124
133
134
SK181
125
SH186
126
SK136
135
SD175
136
SD145
137
SK137
138
139
0
20cm

第26図　出土遺物（7）

4　金属製品

ＳＫ105出土遺物（140～146）

鉄製ｆ字形鏡板付轡（140）は欠損しているが無文の横幅14.0cmのｆ字形鉄板を鏡板にもち、面繋との連結には長さ7.7cmの吊金具を用いる。吊金具についても鉄製で、５ヶ所に鋲を打つ。銜金具は二連で、鏡板との連結部分は錆に覆われ不明である。引手と銜との連結は、銜先環に孔があく方向を直交させて鍛接した円環を鏡板の表側に出し、その円環に引手金具を連結させる。引手金具の手綱に連なる側の円環部は、屈曲する形状は呈さない。

鉄地金銅張杏葉３点（141～143）は剣菱形の鉄地版に金銅板を被せ、その上から鉄製の縁金具を重ね、15ヶ所を鉄鋲で留めている。地板の上に重ねた金銅板は地板の裏に折り込むのではなく、地板と同じサイズで造り、重ねただけである。また、縁金具についても通有の鉄地金銅張杏葉のように金銅板で包むことはせず、鉄板のまま重ねている。つまり、縁金具のない上部心葉部と下半部からのみ金銅板が見える状態である。杏葉の吊金具は鉄地金銅張りで、上に２ヶ所、下に３ヶ所の鉄地金銅張鋲（残存長1.7cm）で皮革と固定している。144 は脚部を共造りにした鉄製十字形止金具で、脚部１ヶ所欠損する。脚を含めた大きさは5.2cm である。鉄製鋲を中央に４ヶ所、脚部にそれぞれ１ヶ所打つ。脚部裏側には皮革と思われる有機質が付着している。145 は環状雲珠の円環部と思われる。約２分の１が欠損しており、復元すると直径6.6cm となる。断面形は隅丸長方形を呈す。円環部に皮革など有機質の付着は見られないがＳＫ105 の出土遺物が馬具のみであることから、これについても馬具の一部と判断した。

年代は、鉄製ｆ字形鏡板であること、剣菱形杏葉の鋲の間隔が広く、造りについても古式の様相を呈することから、須恵器編年でいうところのＴＫ23型式併行期の所産と考えられる。[1]

ＳＸ149出土遺物（146～148）

広根式鉄鏃である。１４６は茎部が欠損するのみで刃部は完存する。関部はやや鈍角につく。１４７は刃部下半部が欠損するが、１４８とほぼ同形式のものと思われる。148は刃上半部が欠損する。146と違い、関部は明確に造らず、刃部全体の形状は菱形になるものと思われる。

ＳＤ125出土遺物（149）

幅5.4cm、残存長5.1cmの不明板状鉄製品である。残存する角部は丸く造る。

ＳＫ182出土遺物（151・152）

和銅開珎である。１５１は３枚重なって銹着しており不明であるが、中央の１枚についても和銅開珎であると思われる。１枚目と２枚目は表側同士を合わせて、３枚目は２枚目の裏側に表側を合わせている。上から２枚目に「珎」と「和」の一部が確認できる。

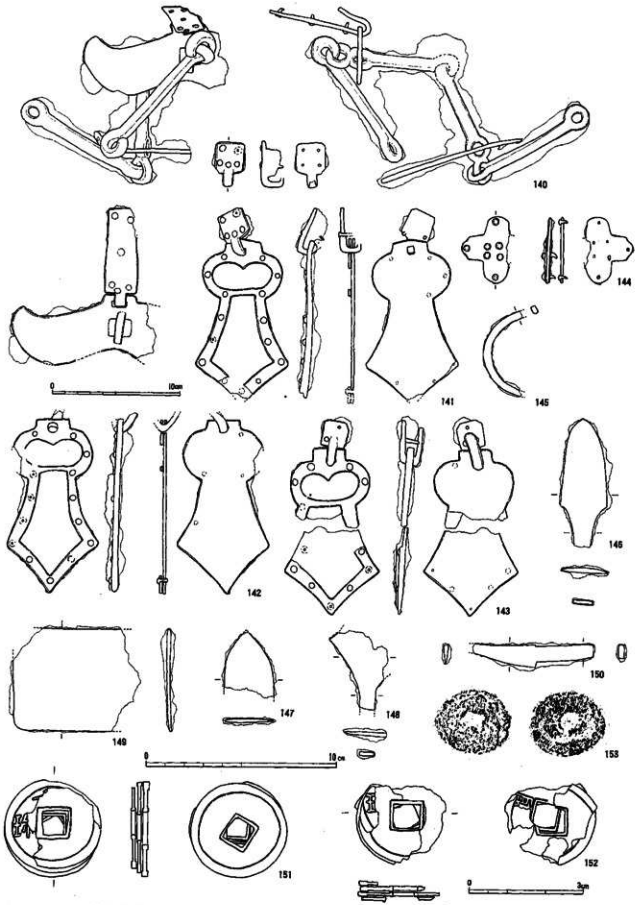
１５２は４枚重なって銹着しているが、いずれも和銅開珎であると思われる。上から１枚目と２枚目は裏側を合わせて、３枚目と４枚目は表側を合わせて重なっている。上から１枚目に「珎」の文字が、下から２枚目に「開」の文字が確認できる。

包含層出土遺物（150・153）　刀子（150）は残存長6.3cmで、茎部は完存するが刃部が欠損する。やや鈍角に開く関部を持つ。包含層出土である。

１５３は煙管の雁首を銹に加工した雁首銹である。近世のものと思われる。　　（山中由紀子）

註

1　田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981



第 27 図　出土遺物（8）140 ～ 145 は 1:3，146 ～ 150 は 1:2，151 ～ 153 は原寸

写 真 図 版

B地区　調査区全景（南から）

B地区　東側全景（南から）

B地区　西側掘立柱建物群（北から）

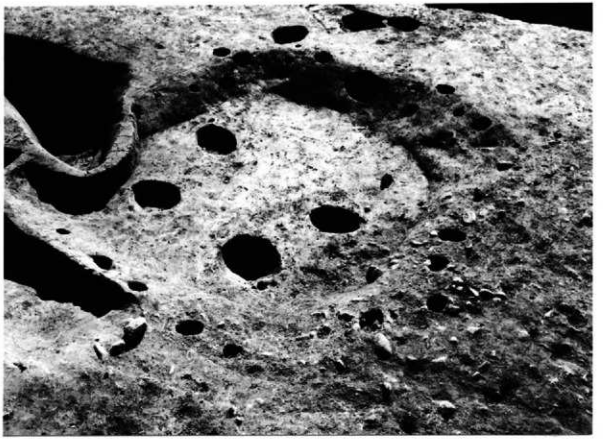
B地区　井戸SE171・SD175（西から）

B地区　SK170（東から）

B地区　SK170（北から）

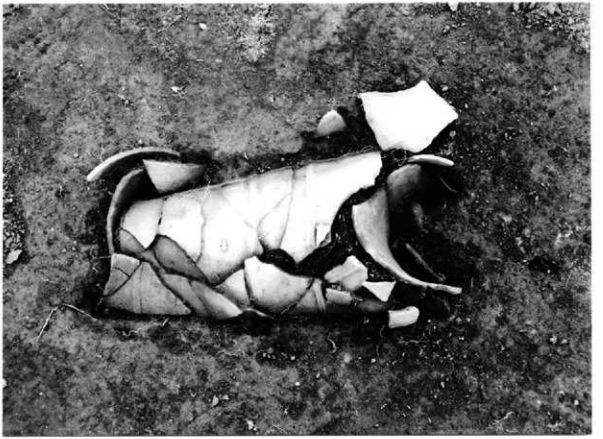
C地区　調査区全景（北から）

C地区　4号墳（北西から）

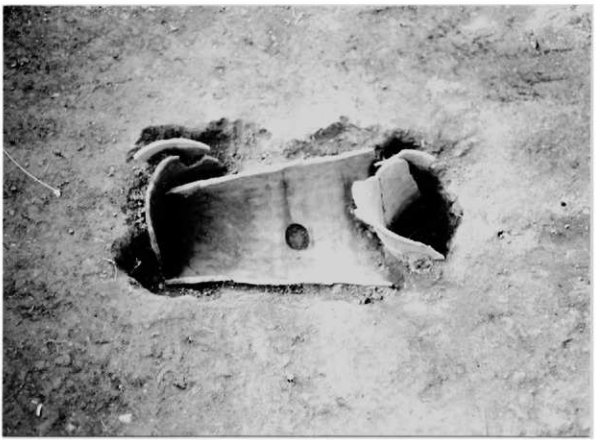


C地区　SH120（北から）

C地区　SK110（北西から）



C地区　SK112（南東から）



C地区　SK112（南東から）

平成6(1994)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年3月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告116-2

大里西沖（2次）遺跡

1994（平成6）年3月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社